

らないと岡田は説く。

土そのものの本質は神秘幽玄なるものであって、現在までの唯物科学によるもとうてい窺知し得ないことは論をまたないところである。しかるに今日までの農業は～略～土の力を蔑視し、一切の作物をより良く生育するには糞尿または化学肥料等の人為的肥料によらねばならないと思ひ、今日に至ったのである。しかるに以上のごとき結果は、土壌の本質は漸次退化変質し、土壌本来の生育力は衰耗するにかかわらず、それに気がつかないため、農作不良の原因は肥料不足によると錯覚し、ますます肥料を施すから土壌の力はいよいよ退化し、今日のごとく日本の国土は瘦地化し、農耕者の口を揃えて嘆ずるところである（『天国の礎—社会・救世自然農法—』三七九—三八〇頁）。

このように岡田が科学や医学を猛烈に批判していたために、＜世界救世教＞は科学や医学を否定しているように、社会一般からは見られることになった。例えば、一九五〇年五月二九日に岡田は贈賄容疑で逮捕され、その当時の新聞記事には「世界メシア教団は医学を否定し農耕の無肥料を唱道（『毎日新聞』五月三〇日夕刊）」、「医薬を否定し“霊にくもりがある”とか“狐、狸の霊のタタリ”などと称し（『読売新聞』五月三〇日）」と書かれている。このことは、当時、岡田の教えは「反科学的」ないし「非科学的」な思想として捉えられていたとみなせる¹³⁾。しかし、近年、とくにEMをめぐって、「世界救世教」および「MOA」とも岡田の教えと科学を結びつけている。以下、EMについて簡単にふれ、その二つの教団がEMとのかかわりにおいて岡田の教えと科学との連関をどのように語っているのかを見ていくことにする。

三 EM についての言説

「EM」とは琉球大学の比嘉照夫によって作られた有用微生物群のことである¹⁴⁾。EMは光合成細菌・酵母菌・乳酸菌・麹菌・有用放射菌といった五科一〇属八〇余種の微生物を共存培養して作りだされたものである。これを用いることで、土壌の状態を良くし—土壌中の栄養素を高めたりするなど—、化学肥料や農薬を使用せずとも、収穫量を上げることができる。EMには1号から4号までである。EM1号はすべてのEM菌を含んでいるものであり、2号は放射菌が中心となっているもの、3号は光合成細菌が中心となっているもの、4号は酵母菌と乳酸菌が中心となっているものである。また、EMはもともとは、化学肥料や農薬の代替として開発されたものであるが、そのEMの効用—抗酸化作用—は様々な領域—環境（ごみ問題）・食品加工・化学合成など—に転用され、それらは総称して「EM技術」と呼ばれている。こうしたEM技術は各地域の農協、地方公共団体、企業や海外においても採用され、ある程度の実績をあげているようである¹⁵⁾。ここで社会学的に重要なことは、EMの実際上の効用もしくは効用についての論争そのものではなく、そうした言説を構成する前提である。すなわち、EMの支持者や反対者がEMについていかなる領域仮説をもって議論を構成し、どのような説明をおこなっているのかということが問題なのである。以下、比嘉が語っているEMについての言説を中心にして、その議論の領域仮説ないしその説明様式を見ていこう。

比嘉によれば、自然界には蘇生と崩壊という大きく二つの方向性があり、蘇生型であればすべてのものが生き生きとし、崩壊型であるとすべてのものがだめになり、今の日本の土壌の九割以上は崩壊型の方向へ進み、農薬や化学肥料がなければ植物はまともには育たなく、そして農薬や化学肥

13) こうした「反科学性」に対して社会的な批判がされたのは戦前も同様である。筆者の聞き取りによれば、戦前戦後とも、批判をさけるためにそうした否定的に見える部分を変更したこともあるようである。

14) 一九八三年に実用化のこと（『地球を救う大変革』参照）。

15) 『人・くらし・生命が変わる EM 環境革命』、『農業が活きる・工業が変わる・環境が蘇る EM 環境革命』参照。ただし、その例はEM支持者のものである。そして、EMに対する批判はなく、逆に批判に対する反批判が報告されている。